

日本の恐竜研究

1824年、最初の恐竜がイギリスで命名されました。しかし、それは遠い海外の出来事で、日本から恐竜化石は見つからないと長く言われてきました。ようやく1978年に岩手県から恐竜化石が発見されると、続々と国内から恐竜化石が報告されるようになりました。それらの化石は骨1点や歯1本から始まり、1990年代になると、骨化石密集層(ボーンベッド)が発見され、多くの恐竜化石が採集されるようになりました。

そんな中、2004年5月に関西では初となる恐竜化石が兵庫県洲本市内で転石(地層から崩れ落ちた岩石)から発見されました。頭から肩にかけての部分的な骨に加えて、尾の骨が含まれていたことから、地層中では全身骨格が保存されていたことを期待させるものでした。さらに、2006年8月には丹波市から竜脚類恐竜の化石が発見されました。その化石は骨同士が関節した状態で保存されていて、一躍脚光を浴びました。その後、2012年1月までの毎冬に実施された発掘調査で、肋骨や腰の骨、尾の骨を中心に全身の約30%の保存良好の化石が採集されました。これら兵庫県産の2大恐竜は、現在ではともに新属新種として学名が与えられています。



写真1 兵庫県丹波市山南町上滝での恐竜化石発掘調査(2010年2月)

タンバティタニスと丹波の恐竜たち

タンバティタニス・アミキティアエは2014年に丹波市産の竜脚類恐竜の化石に与えられた学名です。化石に学名を付与する際、その基準となる化石を指定する必要があり、その化石のことをホロタイプと呼びます。タンバティタニスのホロタイプは、その稀少さ故に、これまで一部のみを公開してきましたが、本展では論文に記載された全てのホロタイプを展示します。

兵庫県丹波地域からはタンバティタニス以外にも歯や卵殻をはじめとする恐竜化石が発見されています。近年は、歯化石に関する研究の進展が顕著で、歯の持ち主のグループを特定できるようになりつつあります。現時点で丹波地域から発見された歯化石には、少なくとも6種類の恐竜のものが含まれていますが、今後の研究が進むことで、さらに多くの恐竜の存在が明らかになるかもしれません。

卵殻化石は2つの新卵属・新卵種と1つの新卵種を含めて、合計6種類が報告されています。この中には骨化石が見つからず、卵殻化石が発見されたことで、丹波地域で初めて存在が確認された恐竜もいます。1カ所で6種類の卵殻化石を産出することは世界的にも珍しく、丹波地域は前期白亜紀(約1億4500万年～約1億年前)における世界最大の恐竜卵殻化石産地とされています。



写真2 2014年に報告されたタンバティタニス・アミキティアエのホロタイプ(一部)

ヤマトサウルスと白亜紀の海

ヤマトサウルス・イザナギイは2021年に記載命名されたハドロサウルス科の恐竜で、本展ではタンバティタニスと同様に、記載された全てのホロタイプを公開します。さらにヤマトサウルスの姿を再現すべく、系統学的に近縁なハドロサウルス科の恐竜を参考にして、復元頭骨や生体模型の製作が進められています。これらは2022年7月から9月まで洲本市立淡路文化史料館にて、10月から本展終了まで当館でご覧いただける予定です。

兵庫県淡路地域の白亜紀末(約7300万年～約6600万年前)の地層からはヤマトサウルス以外にも主に海棲の脊椎動物(魚、カメ、モササウルス、首長竜、海鳥)のほか、空を飛ぶ翼竜などの断片的な化石が発見されています。また、同地域は多種多様なアンモナイト化石が産出することで知られ、その示準化石としての側面はヤマトサウルスの研究論文でも用いられています。

人と化石

これら県内化石の調査研究は当館の連携活動グループや市民ボランティアの協力の下で推進されてきました。現在でも、丹波地域では恐竜化石が見つかった周辺の岩石を用いた化石発掘体験会を調査研究の一環として継続しています。また、淡路地域では連携活動グループが調査や教育普及を活性化させています。さらに、当館でも石割調査や化石剖出に多くの方がボランティアとして参加されています。本展をご覧になり、恐竜や化石に少しでも興味をお持ちになった方がいらっしゃいましたら、当館とともに本県の恐竜化石研究の躍進にご協力いただくと幸いです。

久保田 克博(地球科学研究グループ)

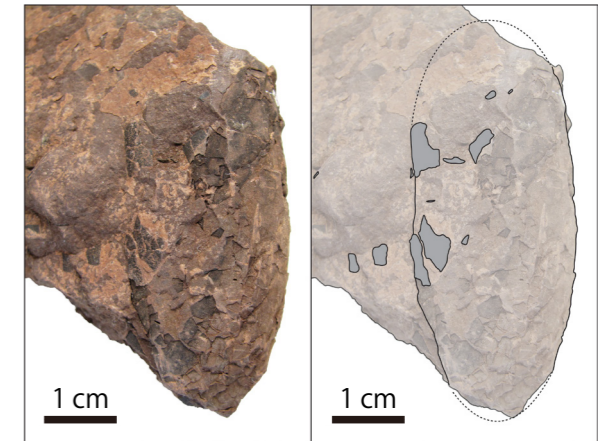


写真3 世界最小の恐竜の卵殻化石(ヒメウーリス・ムラカミイのホロタイプ)



写真4 2021年に報告されたヤマトサウルス・イザナギイのホロタイプ(一部)



写真5 連携活動グループによる淡路地域での調査(2017年2月)